

オムレツの誘惑

kou

始め

一人暮らしをはじめると、実家ではしなかったことをしなければならない。炊事、洗濯、そう、料理。

僕は料理を学びはじめた。もちろん学びは始めている段階であり、昨今の経済情勢だとか、台所事情を鑑みると、節約の観点から学ばない手はない。

が、ここでいささか問題がある。学ぶといってもスクールのなものに通うには費用がかかり、節約を信条としている僕にとって、負担が大きい。

なので、料理について試行錯誤することにした。包丁を選び、まな板を選ぶ。レシピ本を購入し、いざ調理を開始し、レシピ本を完全に無視し、目玉焼きを作った。なぜ、レシピ本を使用しなかったかという、調味料は複雑であり、千切りやみじん切りという技術を習得していないからだ。なのでレシピ本を無視させて頂いた。よくいうじゃないか、^ミ小さいことからコツコツと、て。まあ、それも言い訳に聞こえるが。ああ、二〇一三年の目標は、言い訳をしない、にしよう。うん。そうだ。それがいい。

昨年末からはじめた料理も、比較的、包丁のカットスピードも早くなり、湯の分量、フライパンの使い方、火と按配。調味料のさじ加減。少しずつ、一歩、一歩、料理の腕が上達していくのを感じた。料理というのは不思議なもので、火でぐつぐつと煮込んでいる最中に、サラダを作ったり、火でぐつぐつ煮込んでいる最中に、使用していた調理器具を洗剤にスポンジをつけ、丹念に洗う。水で流し、汚れが用水路に向い、吸い込まれていく。一時期、汚れが用水路に吸い込まれる過程が癖になった。まあ、それはいい。

終わり

さらに癖になったといえば、オムレツづくりだ。基本的に卵料理が好きな僕は、甘ったるいオムレツを好む。なので、自分で試行錯誤を施し、砂糖にこだわり、フライパン技術を総動員し、ふわりとオムレツを作るために、なんども、なんども、試行錯誤した。合計三十六回の失敗し、三十七回目に、僕が望んでいたオムレツが出来上がった。白い艶やかなお皿に盛り、オムレツから湯気が立ち昇り、その上に赤いケチャップをジグザグにかける。お腹が鳴り、姿勢も幾分か正したくなる雰囲気は僕のオムレツにはある。だって、僕が作ったんだから。それぐらいの儀式めいたものが必要だ。僕はスプーンを使い、一口食べる。

美味しかった。

オムレツを食べ、あることを思った。オムレツが似合う情景がある。朝方、女の子との情事後に、「お腹が空いた」と彼女が言い、窓から射し込む朝日がキッチンを照らし、彼女を照らし、オムレツを二人で食べる。ああ、二〇一三年の夢がもう一つ出来た。